

夕暮れ時に、光がある キングス・ガーデン物語



日本キングス・ガーデン連合 会長 泉田 昭

夕暮れ時に、光がある キングス・ガーデン物語

日本キングス・ガーデン連合 会長 泉田 昭

(2010 年 4 月 記)

1.はじめに

日本は今、世界に例を見ないスピードで、高齢化社会を迎えています。それだけではなく、少子化と核家族化により、さらに女性の社会進出と活躍によって、また人々の意識の大きな変化によって、高齢者には厳しい時代となりました。日本は近代化しながら、高齢者には砂漠のような国になってしまったのです。

そのような日本において、キングス・ガーデンはその多様な働きによって、高齢者にとってオアシスである主の園をつくろうとしています。それは、不思議な神の導きであり、恵みと奇蹟に満ちた物語です。

その物語を語ることによって現代に生きて働く神の力を共に味わいたいと思います。

「夕暮れ時に、光がある」という聖書のことばがありますが、人生はその最後の生き方が最も大切であり、高齢者のために何をするべきかが今日の最も重要な課題です。波乱に富んだ人生の航海を終え、静かな港で、幸な時を感謝と喜びにあふれて共に過ごしたいものです。

2.主の園のようにする

「その砂漠を主の園のようにする」という理念のもとで、キングス・ガーデンの働きははじまりました。筑波の里にキングス・ガーデン軽費老人ホームができたとき、その理想に燃えて全国から多くの方々が入居されました。

それらの中に、幾人かの女性教職もおられ、さまざまな教会の信徒も少なくありませんでした。また、一般から入られた方々も多くいました。信仰の立場や教会の背景は異なっても、一つ心になって「主の園にする」熱い思いに燃え、その生活をはじめました。

それは、1995 年、川越にケアハウス「主の園」がつくられた時も同じでした。多くの教派からそれぞれの背景を持って、また豊かな社会経験を携えて、入居されます。東京に近く交通に便利であること、ケアハウスのグレードが高いこともあって、社会で活躍された方の入居も少なくありません。そして、キングス・ガーデンを理解し、また共鳴し入所し、共に生活をしておられます。

軽費老人ホームにしても、ケアハウスにしても、60 歳以上で健康であり、基本的には自分のことは自分でできる方が入居することになっています。自立した者が協同の生活をす

るのです。それは、やさしいようでむずかしいことです。同じ問題についても、個性が異なると、意見も違ってきます。その調整に愛と知恵が求められます。中国の諺に「小人は同じで和せず、大人は和して同せず」とありますが、それぞれの個性を大切にしながら全体の調和を育てることはほんとうにむずかしいことです。また、入居者を管理するのではなく、自由に主体性のある生き方を尊重する大切さも教えられました。

筑波キングス・ガーデンは、はじめに軽費老人ホームがつくられたが、入居者が加齢するために病弱になる方が現われ、特別養護老人ホームを建てました。当初そのためにある方が、私財の一部をささげることを申し出られたが、さまざまな行き違いのためにむずかしくなりました。

その時、理事の森山論先生が尽力され、計画は具体化されました。理事長の安藤先生は病床にあり、実務は副理事長である私が担わなければならなくなりました。松山潔先生が建設委員長となって、その完成に努力されました。多くの困難もあったが、特別養護老人ホームは立派に完成し、続いてチャペルもできた。その後、宇都宮和子氏が施設長となり、在宅福祉棟を建て、行政と地域から高い評価を受けたケアを行なっています。

川越キングス・ガーデンは、はじめに特別養護老人ホーム（施設長・児島康夫氏）ができ、さらに広いニーズに応えるためにケアハウスを建てることになりました。建設委員長は村上氏で、土地の取得と建築のために尽力されたが、さまざまな行き違いのために辞任されました。厳しい試練に直面したが、理事の中嶋栄三氏が建設委員長の重くむずかしい責任を負い、立派に完成されました。3階には茶室や温水プール、2階には250名集まれるチャペルもあります。超豪華なケアハウスであり、86名の方が入居できる大型施設です。（山崎公三氏）

これらの経験から、多くのことを教えられました。

まず夢を持ち、理念を明らかにすることです。夢がなければ、実現ありません。理念が明らかでないと、共鳴し協力する者も現われません。大きな時代の流れを見、社会の必要に応えるヴィジョンが示されるとき、多くの人が協力をはじめます。

次に、大きな働きには多くの困難があります。人をめぐって、経済に関して思いがけない問題が生じてきます。しかし、問題があることが問題なのではなく、問題をどう解決するかが問題です。問題を正しく解決したときに発展があり、また、神は解決の道を必ず備えておられます。

最後に、神の力は人間の弱さの中に働くことです。人間的には幾度行き詰まったことで

しょう。そのとき、神は思いがけない人を備え、想像を超えた方法で解決して下さいました。人が自らの弱さを知ったとき、神は生きて働かれます。「私の力は、弱さの中に完全にあらわれる」（Ⅱコリント 12.9）といわれているとおりです。

3.全国に広がる

筑波に特別養護老人ホームが完成するころ、三重県出身で鹿島にある会社で働いている方が訪ねて来ました。キングス・ガーデンを郷里の三重県度会郡大宮町につくりたい、そのために土地を提供したい、西宮市にある家を売って、資金としてもちいたい、とのことでした。

早速、大宮町に赴き、土地を見たり、柏木町長にお会いしました。調べてみると、一つの町だけではつくることはできないので、隣の紀勢世町や大台町などとの話し合いが必要であることが分かった。紀勢町の谷口町長に会うと、誘致にすこぶる熱心で、紀勢町につくってほしい、市有地を提供してもよい、とのことでした。実際には、その土地を購入することになるのですが、そのようないきさつで紀勢町に特別養護老人ホームをつくることになりました。

一つの施設をつくるために、しばしば三重県庁に赴いたり、地元の町を訪ねて相談をしたり、手続きをしたりしなければなりません。ついに、ミエも外聞もなくなり、実行力にすぐれている堀内顕牧師にすべてをお願いすることにしました。幸い、その申出を快く承諾して、理事長に就任してくださいました。また、福祉行政に経験豊かな東安弘氏が協力され、多くの方の参加と協力によってその働きは進められました。

そのようにして、特別養護老人ホーム「共生園」が完成し、東氏が、初代施設長に就任しました。現在は堀内幸子氏です。さらに、大台町に複合施設「大台共生園」（施設長・堀内剛親氏）がつくられました。

宮城県気仙沼市に、佐藤春子さんという方が住んでおられます。気仙沼市内にもキングス・ガーデンをつくりたいとの相談がありました。ご主人は医師で、気仙沼市の医師会の会長もしておられたが、救われてクリスチャンになりました。そして、夫婦揃って、神と人ともに尽くす働きをしたいと祈っておられたが、ご主人が主のもとに召されてしまいました。そのご主人の遺志を継ぎ、気仙沼市にキングス・ガーデンをつくることを思い立ち、相談に来られたのです。

私は気仙沼市に赴き、その町や候補地を見、協力してくださる安部夫妻や松下さんにお会いしました。その祈りと計画を聞き、施設をつくるノウハウを話し、共に祈りました。その設立の実務については、東氏も協力することになりました。

現実の一つの高齢者施設を建てあげるためには、行政との忍耐強い交渉、協力体制の確立、土地の確保、資金の調達、建設業者の選定、近隣住民との話し合いなど、むずかしい問題が多くあります。そのために佐藤春子さんはしばしば相談に来られましたが、また静かな山に退き夜を徹して祈られるようになりました。そのとき神は奇蹟的にそれらの問題を解決してくださり、やがてケアハウス「南三陸キングス・ガーデン」が完成しました。施設長には、仙台で牧会していた森正義牧師が就任されました。

石川県内灘で実り多い牧会をしている横山幹雄牧師は、高齢化する社会における教会の働きとして、キングス・ガーデンをつくりたいと祈っておられました。そこで、シアトルにあるキングス・ガーデン、ニュージャージー州アトランティック市で教会の一室からはじまったケアリングの働きを視察し、教会の働きとしてのグループホームをつくることを決められました。キリストにある高齢者が共に生活し、昼間は教会が奉仕できる場となる、そのようなホームをつくりたいと願われるようになりました。

そこで、同じ教団である聖書教会連盟が協力して取り組むことになり、金沢市に「キングス・ガーデン金沢」が誕生しました。山口夫妻が施設長として献身的に奉仕されました。

三重県津市で牧会している村上久牧師は、「キングス・ガーデン三重」の理事として共生園の働きに協力していたが、病院伝道で救われた方の意志と献金を生かし、津市にも高齢者施設を作りたいと祈っておられました。そして、教会の隣接地にケアハウス「ベタニヤハウス」が生まれました。教会と施設が共に協力し、宣教と福祉の働きが、飛行機の両翼、車の両輪のように行なわれています。

日本キングス・ガーデン連合の研修会に、中村さんという方が参加していました。いつも笑顔を絶やさず、夫婦で高齢者のために仕えたい、そのために土地をささげたいと考えておられました。

高山祝福教会の奥深山頼義牧師は、同じように高齢者のためにホームをつくりたいと祈っておられました。公営のホームでは安心して生涯を全うできない信徒の姿を見て心を痛め、そのような方々のために教会にしっかり結びついたホームをつくりたいと考え、導きを求めておられました。

それらの祈りの実として生まれたのが飛騨ハレルヤ・ホーム望郷苑であり、「さらにすぐれた故郷すなわち天の故郷にあこがれ」ながら（ヘブル 11.16）、主にある地上の生活を共に生きる場です。

群馬県北群馬郡白井において、高田泰男師は不登校の児童のために施設をつくって、その教育のための働きをはじめられました。やがて終身介護型の老人ホーム「ナーシングホーム白井城」をつくり、高齢者福祉にも取り組むようになりました。献身的な介護、自然に恵まれた環境、調和のとれた栄養管理によって、理想的なケアを目指しています。日本キングス・ガーデン連合研修会にはいつも参加し、意欲的にその働きを進めておられます。

同じように、研修会に福島第一聖書バプテスト教会の婦人たちも参加し、高齢者のための働きについて学んでおられました。1994年、主にある姉妹が天に召されましたが、自分名義の土地を教会にささげる遺書を残しておられました。その意志を生かしてどのように用いたらよいか、さまざまな議論が繰り返し行なわれ、高齢者のために用いるのがよいとの結論になった。そこでルツの会が生まれ、教会におけるコンセンサスづくり、募金、計画の作成とその実現に全力を傾けました。そのようにして誕生したのが、「シャロームホーム」であり、教会員の高齢者福祉と交わりのために活用されています。

大阪市で栄光社を経営し、信徒として多くの働きに協力しておられる澤村俊治氏は、兵庫県氷上郡山南町から依頼され、クリスチャンの信仰と証しの結晶として、特別養護老人ホーム「山路園」と、ケアハウス「やまじいこい苑」をつくられました。山路園の園長は澤村安由里氏、やまじいこい苑の苑長は澤村哲夫氏です。福音の僻地と言われ、教会のない地方において、地域にしっかりと根を下ろし、すばらしい証しが行なわれています。

広島県呉市の中心街である本通り商店街に、ケアハウス

「呉ベタニアホーム」が建っています。市街地にある老人ホームとして、一般の雑誌にも紹介されています。

日本キングスガーデン連合の研修会にいつも参加している濱田牧子さんは、父親が遺した土地をどのように、主のため社会のために活用しようかと祈っておられました。そこで、小宮山林也牧師が理事長になって社会福祉法人政樹会をつくり、その土地を半分を寄付とし、半分は買い取るかたちで「ベタニアホーム」ができました。施設長は濱田牧子さんです。

私の近くに住んでいる区会議員は、筑波キングス・ガーデンを見て、練馬にもぜひキングス・ガーデンをつくってほしいと繰り返し依頼してきました。私も同じような祈りがあり、練馬区や東京都と交渉し、その実現に努力をはじめました。有楽町線平和台駅から4分、公園に面し高校の正面前の超一等地を取得することができました。そこで、イギリス、アメリカ、日本の国際設計チームに依頼し、これまでの日本では見られない感覚で設計し、建設しました。完成した建物は、「近代建築」や「新建築」という建築の専門誌にも紹介されました。建設委員長として、金本悟牧師が奉仕されました。

都市のすぐれた環境にあり、交通も便利であり、面会に来る方も多く、ボランティア活動も活発です。施設長は五十嵐桂子氏です。

4.多様なニーズに応える

今の時代、個性が強調され、ライフスタイルは多様化し、高齢者のニーズも複雑になっています。それに従って、国の福祉政策も、時代の大きな流れとともに、大きく移り変わってきています。

最初は、高齢者は弱く貧しい存在であるという理解に基づき、養護するという政策がとられました。そして、養護老人ホームは生活の援助を必要とする高齢者を養護するために、経費老人ホームは安い費用で利用できるように、それぞれつくられたものです。そこには、生活を援助するという思想の福祉政策がありました。

しかし、生活の援助よりも身体の介護の必要に視点が移り、特別養護老人ホームがつくられるようになりました。身体的機能が衰えたり、認知症になって、家族でも十分な介護で

きなくなったりした人たちを、国の費用で介護しようというのです。利用者は、本人や家族の収入に応じた負担をするということになっていました。

ケアハウスは、経済的ケアというより、むしろ社会的生活のケアを必要としている人たちのため、食事をはじめとする生活上のケア、社会生活を続けるためのケア、またある程度の身体的ケアを行います。しかし、それぞれの自由を個性を尊重し、自立した生活ができるように協力するのです。社会的背景として、日本における家族と人間関係が厳しく変わり、高齢者も家族から独立して生活しなければならなくなったことがあります。

日本におけるキングス・ガーデンの働きは、時代と社会のこのような大きな流れと人々のニーズの変化に応じ、移り変わってきています。

最初は筑波に軽費老人ホームが作られ、続いて特別養護老人ホームができた。三重県や埼玉県においては、まず特別養護老人ホームができ、続いてケアハウスがつくられました。兵庫県では、特別養護老人ホームとケアハウスが同じに建てられました。福島県では、軽費老人ホーム、有料老人ホーム、老人保健施設、そして特別養護老人ホームがつくられました。宮城県気仙沼市と広島県呉市では、それぞれケアハウスがつくられました。

キングス・ガーデンは、時代の流れと社会のニーズに応えるために、最もふさわしいケアを信仰と愛をもって提供しようとしています。最近では、トータル・ケアということ、私は繰り返し強調しています。それは、全人的・総合的ケアのことです。

まず、フィジカル・ケア(身体的介護)で、生活に必要な身体的介護を行うことです。つまり、食事、入浴その他すべての生活介助です。そのような生活介助とともに、医療も大切です。医師と看護師による日常的な健康チェックと、治療活動を行っています。

次にメンタル・ケア(精神的介護)で、精神的なさまざまな苦しみと悩みに応えるケアです。社会における人間関係で受けた傷をいやし、親しい者を失った悲しみを慰め、家族から離れて生きる孤独に応えるために、愛の介護とともにセラピーとカウンセリングによってケアを行ないます。セラピーとは、いやしのことで、音楽セラピー、芸術による

セラピー、動物によるセラピー、交わりによるセラピーなど、実に多様に行なわれるようになっています。

最後はスピリチュアル・ケア(霊的介護)です。人間はその生と死について深い不安におびえながら生きています。魂における葛藤もあります。それら人間として最も根源的な諸問題に応えるために、キングス・ガーデンはそれぞれの施設に協力牧師会をつくり、礼拝、カウンセリング、交わりによって充実したケアを行なうようにしています。

また、日本キングス・ガーデン連合の中には、その多様なニーズに応えるために、社会福祉法人をしてではなく、すでに見てきたように、教会の働きとしてケアを行なっているところもあります。そこでは、すべてのケアが総合して行なわれやすいです。ただ、国の補助がないので、利用する者の負担は重く、働く人の偽性は大きいです。

教会の祈りと協力とともに、介護施設を上手に活用し、充実したケアが行なわれるようにするとよいと思います。また、グループホームも、これから多くつくられるようになるでしょう。

利用する方は、それらをよく調べて研究し、自らに最も必要なサービスを自由に選びながら活用するとよいでしょう。最近では、地域福祉が強調されるようになり、ショートステイ（短期入所生活介護）、デイサービス、ホームヘルパーの派遣などが行なわれるようになりました。これらを積極的に利用されるとよいと思います。そのためには、情報と知識が必要であり、それぞれの施設にある在宅介護支援センターに相談するとよいでしょう。

キングス・ガーデンは、高齢者には砂漠のような現代社会ににおいて、主の園をつくりあげるために全力を尽くしています。そこには、楽しみと喜び、感謝と歌声とがあふれています。

5.わたしにしたのである

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」（マタイ 25.40）。高齢者福祉が国の制度として行なわれるようになって、施設の充実はめざましい。新しくしゃれた建物が、全国の各地に建てられるようになった。しかし、国民の意識はそれほど変わらず、「国の世話になるのは嫌だ」という声も聞こえてきます。

また、施設を運営する者たちの間には、「行政の指導は細かく画一的で、特色のある福祉を行なうのがむずかしい」という意見もあります。しかし、介護保険制度の時代になり、福祉のあり方は大きく変わってきました。国費による措置ではなく、地方自治体が保険者となり、国民から保険料を集めて、介護サービスを提供します。国民は、40歳を過ぎると第二号保険者となり、定額の保険料を払わなければなりません。65歳以上になると第一号保険者になり、それぞれの地方自治体が決めた保険料を支払わなければならない。

多くの人は、年金等から徴収されているので、気がつかないかもしれませんが。そして、65歳になると、申請に基づいて調査と審査があり、自立、要支援、要介護1-5のうちどれかに判定されます。要支援、要介護と判定された者は、ケア・マネージャーとともにケア・プラ

ンをつくり、それに基づいてサービスを受けることができます。また、福祉サービスを提供する社会福祉法人や施設は、利用者と自由に契約し、特色のある、また個性のあるサービスを提供するためには、法人や施設の理念が問われ、それを実践することが求められます。これからは、画一的な福祉ではなく、個性と特色のある福祉の時代です。キングス・ガーデンは、これまで基督教の信仰と精神に基づき、特色ある福祉の働きを行なってきました。これからは、その特色をさらに発揮できるようになるでしょう。

5.1 主に仕えるように

キングス・ガーデンは「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」(マタイ 25.40)。と言われたキリストのことばに従い、主に仕える精神で介護の働きを行なってきました。「これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たち」とは、効率主義に生きる人々の目には役に立たないと思われ、社会的にあまり評価されない人たちのことであるといえるでしょう。経済的利益を追求する現代の競争社会においては、そのような者は見捨てられ、無視されるだけです。しかし、キリストはそのようなものを限りなく愛し、「わたしの兄弟」と言っておられます。

キングス・ガーデンは、キリストの精神に従い、そのような人たちの人権と人格を限りなく大切にし、キリストに仕えるように利用者に仕えます。この社会の人間的な価値観を超え、真実に人に仕えるのです。

福祉は人である、とされています。

まず、施設の管理運営に携わる理事長や施設長、生活相談員の存在と働きは大きく、その人によってすべては大きく変わってきます。キングス・ガーデンの精神をよく体得し、管理能力のあるリーダーが求められます。幸い、キングス・ガーデン関係の諸施設長は、使命感にあふれ、資質と能力のある人たちが備えられていることは感謝なことです。また、日本キングス・ガーデン連合は、そのようなリーダーのために毎年研修会を開催し、理念とノウハウを共に学び、共有することに努めています。

介護保険制度になり、会計や経理のあり方、その実務も大きく変わり、新しい理念と会計基準に基づいて行なわれるようになりました。その切り替えに追われましたが、

キングス・ガーデンの諸施設は迅速に切り替え、コンピューターのソフトも新しく導入し、効率化を図っています。事務職員は、その激しい変化によく適応し、スムーズに働きを行なっています。

直接処遇に携わる職員の存在は重く、その働きは重要です。直接介護に携わるために、非常に大きな働きであるが、幸いキングス・ガーデンの諸施設は多くのすぐれた介護職員に恵まれています。特に若い職員がキリストの心を持って働いている姿には頭が下がる思いがします。

高齢者福祉は、健康と生命に深く関わっており、医師と看護師の存在と働きは重いです。多くのすぐれた看護師が働いておられますが、それでもなおすぐれたクリスチャンナースの確保が求められています。管理栄養士の働きも重要で、入居者や利用者に食事の楽しみと健康を与えるために努力しています。

これからの福祉は、地域社会に仕える働きであり、ショートステイ、デイサービス、在宅介護支援センター、ホームヘルプサービス事業などを通じて行なわれています。そこでは、地域社会との深いかかわりがあり、家庭との生きたふれあいがあります。

5.2 協力牧師会

キングス・ガーデンは、すでに述べたようにトータル・ケアを目指していますが、それを実現するためには多くの方の協力が必要です。特に、スピリチュアル・ケア(霊的ケア)のために、協力牧師の存在と働きは欠くことができません。

最初、川越キングス・ガーデンにおいて協力牧師をつくるとき、埼玉県内にある諸教会の牧師先生に集まっていただき、四つのお願いをしました。第一に、祈ってください。第二に、集会とカウンセリングで奉仕してください。第三に、良い職員とボランティアを派遣してください。第四に、献金してください。まことに勝手なお願いであつたが、快く受け入れ、協力をはじめてくださった。

毎日、職員と利用者の集会でメッセージをし、希望者にはカウンセリングをしてくださるようになりました。精神的に励まされ、救われてバプテスマを受ける方が多く現われるようになりました。そこで、筑波、練馬、草加に

においても協力牧師会をつくり、同じように奉仕をしていただいています。

この協力牧師の働きによって、施設の霊性は整えられてきます。

精神的な諸問題も解決し、職員はますます親切に、入居者はますます輝いている、と言われるようになりました。キリストを信じてバプテスマを受ける方が多く現われるようになり、キングス・ガーデンは天国の凱旋門とも言われるようになりました。死に対する恐れはなくなり、死は、もはやタブーではなくなりました。

キングス・ガーデンはターミナル・ケア(終末ケア)を、医師と看護師の協力を得て行なっていますが、家族の要望があれば施設内で牧師の協力によって葬儀なども行なうことができるようになりました。

川越キングス・ガーデンは、近くにある武蔵野霊園の一画を取得し、立派な墓地を完成しました。希望者は、実費で利用することができます。筑波キングス・ガーデンはチャペルの中に納骨堂がありますが、墓地の建設も検討しています。

協力牧師会は平均して三十名前後の牧師によって構成され、毎日の集会のために、平均して月に一回程度メッセージで奉仕していただいています。その連絡、アレンジなどのために、三、四名の方が世話人として奉仕しておられます。また、年に一回全体会を持ち、連絡と研修の時としています。

協力牧師会によって、キングス・ガーデンは教会と地域と密接に結び合わされ、福祉は社会と教会の働きであると理解されるようになりました。それによって、キングス・ガーデンの働きは全体として充実し、健全になりました。

5.3 ボランティア活動

キングス・ガーデンは多くのボランティアによって支えられ、育てられています。それによって、さらにゆとりのある充実したケアが行なわれるようになりました。ボランティアは、主として教会と地域社会から遣わされてきます。

まず、教会からですが、協力牧師会の牧師の薦めと教会の推薦によって、多くの教会の青年と婦人たちが来られます。それぞれの施設にはボランティア・コーディネーターが配置されていて、相談しながらボランティア活動ができるようになっています。自らの特技を生かし、施設の必要に応じ、介護の手伝いをしたり、施設の整備をしたり、時には利用者の話をきいてくださるだけでもいいのです。イースターやクリスマスの特別行事はまさに出番で、教会における奉仕の経験を生かしながら、施設でも奉仕していただきたいと思います。

次に、地域社会からで、地域におけるグループや学校関係の活躍が目覚しいです。練馬区春日町に、「こぶしの会」という住民グループがあり、福祉施設をつくるために、長年空き缶回収などの働きをしてきました。練馬キングス・ガーデンをつくる話を区役所で聞き、リーダーの方から問い合わせがあり、訪ねてこられました。キリスト教のこと、計画している老人ホームのことなどを詳しく説明しました。すると、これまで空き缶の回収などで集められた、文字通り汗の結晶である五百万円を超える資金を寄付したいと申し出られました。完成したのちも、ボランティアの中核としてすばらしい奉仕活動をしておられます。

練馬キングス・ガーデンに隣接して、都立練馬工業高校があります。その生徒たちが車椅子の修理などの奉仕をはじめ、最近ではPTAの皆様が積極的に奉仕されています。また、幼稚園、保育園の園児が、折にふれて可愛い歌で慰めてくれます。地域社会には、多くの音楽、舞踊、趣味のサークルがありますが、それぞれの特技を生かして奉仕していただきます。また、教会員の方で美容師、理容師の方々もいらっしゃり、施設でよい奉仕をされています。

筑波キングス・ガーデンは、毎年11月、バザーを開いています。近くの町や村から千人を超える方が集い、地域の大きなイベントになっています。そのバザーのために、多くの地域住民が、献品、準備、販売などのために奉仕され、施設と地域社会が一つに溶け合っています。

このように、キングス・ガーデンの働きは、地域社会においてキリストに仕える精神で高齢者に仕え、教会と社会に支えられながら、その働きを行なっています。それによって、高齢者に仕える精神は、社会のすべての人たちの間にも広がっていくのです。

6.すべてが益となる

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 8.28)。

キングス・ガーデンの働きを通して教えられたことは、神の導きと働きです。さまざまな問題や試練も多くありましたが、神はすべてが益となるように共に働いておられることを知りました。

「何も思い煩わないで、あらゆることばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」(ピリピ 4.6 - 7)。

6.1 ピンチはチャンス

1999 年 8 月 14 日の朝、川越キングス・ガーデンの児島施設長から電話がかかってきました。

「今回の台風は異常で、特養はすべて浸水しそうです。これから利用者のすべてを隣のケアハウスに移します。祈ってください」

周囲はすでに湖のようになっていたので、施設長をはじめすべての職員は腰まで水に浸かりながら、利用者を救命ボートに乗せて、ケアハウス「主の園」に移しました。水位は上がり、2m土盛りをしてその上に建てられた施設の床上 86 c mまで冠水しました。これまでにない水害であり、近隣の人たちも経験したことのない出来事でした。

私が行ったときは、水はほとんど引いていましたが、床は泥水が漂い、ベッド、机、衣類、パソコンなどが無残にもあちこちに転がっていました。専門家の試算によると、復旧に一億四千万はかかるといういました。

私は絶望的な気分に襲われ、再建は無理だと覚悟しました。しかし、そのとき祈り、思いを変えました。見直してみると、感謝することが多くあることに気づきました。第一に利用者が全員無事であること。第二に施設長をはじめすべての職員が一致して働いていること。第三に百名近いボランティアが駆けつけ、献身的に奉仕していること。それらを知ったとき、感謝の思いにあふれました。

復旧には一億円近くかかりましたが、国や県からの災害補償と多くの方からの見舞い金と献金で、それらのほとんどを支払うことができました。施設は新しく生まれ変わりました。しかし、再びこのような災害に遭うことを心配し、理事会は周囲に高い塀をめぐらす計画を立て、埼玉県に打診しました。それに対し、県からは、美観を損ね利用者に閉塞感を与えるので好ましくない、それほど心配であるなら前庭を1 m土盛りし、避難をかねて二階建ての建物を建てたらどうか、との意向が示されました。私たちは

その意向を受けて三十床の増床を決め、市と県の承認を得ることができました。瓢箪から駒、水害から増床、神の不思議な導きでした。

2000年5月、倉形彰氏から草加市が高齢者施設の建設を一般公募しているので、キングス・ガーデンも参加したらどうですかと勧められました。早速、中嶋副理事長と相談し、企画書、設計図、資金計画表などを二週間で作成し、提出しました。一都四県から十九の社会福祉法人が参加し、最終的にキングス・ガーデンが選ばれました。それには三つの理由があったといいます。第一にケアがすぐれている。第二は経営が安定している。第三はターミナルケアをしている。市や議会の関係者が川越キングス・ガーデンを視察したとき、職員の態度と接遇が非常に良く、利用者の表情が穏やかで輝いていることに、深い感銘を受けたとのことでした。

草加市に挨拶に赴き、市長にお会いしたとき、言われました。「これまで多くの問題があり、難産でした。よろしくお願いします」

そこで、私は申し上げました。「難産の子ほど立派に育ちます。楽しみにしてください」

しかし、それから難産でした。近隣住民の反対もあり、中嶋副理事長は幾十回も足を運んで説得し、やっと同意を取り付けることができました。住民の方の要望や県の指導もあり、当所予定していた建設費は二億五千万円増え、三十億円近くになり、

資金調達の問題もありました。しかし、主はすべてを導き、最善をしてくださることを確信しています。2001年秋には着工、2002年末完成し、2003年5月に開設しました。現施設長は栗原基氏です。

6.2 新しい福祉の時代

日本における高齢者福祉は、国費による措置から国民の保険料による制度となり、国民の間にはなお多くのとまどいと不安があります。また、福祉の施設を運営し、働くものたちにも多くの不安がありました。試算してみると、特別養護老人ホームでは約10から20%、デイ・サービスでは40%の収入減になりそうです。施設は利用者によって選ばれますが、

その確保はできるのでしょうか。介護保険制度への移行のために、調査、認定、それに基づくケアプランの作成、利用者への説明と契約書の作成、新しい会計基準への変更と、おびただしい作業が待ち構えていました。

そこで、一年前から準備にかかりました。まず、特色のある施設づくり。キングス・ガーデンはキリスト教の精神に基づき愛のケアを行なっているので、その特色を多いに発揮できるようにする。草加にキングス・ガーデンをつくる时候にも、その特色が認められ、評価されました。また、直接接遇に当たる介護職員の訓練と充実に力を注ぎました。

次に、組織と体制を統合化し、共に協力しながら働くようにすることです。特養部門と在宅部門を統合的に統一するようにしました。

最後には、効率化です。接遇から保険料請求まで一貫したプログラムをつくり、効率化を図りました。慣れるまで大変でしたが、慣れるとゆとりのある働きが行なわれるようになりました。

多くのボランティアによる奉仕は、それによって充実した介護ができるようになっただけでなく、多くの人に支えられる施設づくりにも貢献しました。教会と社会に支えられている福祉は、ボランティアによって育てられることがよくわかりました。

もともと日本における福祉は、個人の善意と犠牲による慈善活動でした。それが国による福祉政策となり、やがて国民の保険による制度と移ったのです。そこでは社会に支えられた福祉が理念となり、ある意味ではボランティアによって実現していると言うことができるでしょう。

介護保険制度に移ることに大きな不安がありましたが、徐々に、良い結果も現われるようになってきました。

まず、施設の特色が自由に発揮できるようになりました。キングス・ガーデンはキリスト教の信仰に基づく愛の介護を目指してきましたが、それがすぐれた特色として一般にも紹介されるようになったのです。

宗教のために福祉を利用するのではなく、信仰によって福祉にいのちと特色を与えることができるからです。

次に、教会と社会に支えられている祝福です。協力牧師会の働き、多くのボランティアの活動、継続的にささげられる寄付や献金によって、充実しゆとりのあるケアが行なわれるようになりました。これは、他の施設にはない、大きな特色であると思います。

最後は、経営の安定です。利用者が増え、効率よく運営され、多くの献金によって、安定した経営ができるようになりました。もちろん、さらに努力しなければならない施設もありますが、全体としては安定しているようです。

日本における高齢者福祉は、最初は個人や宗教団体などによる慈善事業として行なわれてきました。個人や民間の団体と犠牲によって行なわれ、動機は非常に純粋でした。しかし、その資力と働きには限界がありました。

1970年代になり、特別養護老人ホームが生まれますが、救貧事業というより家族事情による介護、特に身体的介護のための福祉という考え方に変わりました。歴史的・社会的背景としては、高齢者の増加、少子化、核家族化による家庭における介護の困難があります。つまり、経済的理由よりも社会的状況によって、施設を利用しなければならない人が増えたのです。軽費老人ホームに変わって、ケアハウスが生まれたのも、同じ社会的事情によるものです。

特別養護老人ホームに入所するためには、施設や在宅支援センターに申請し、判定委員会の認定を受けなければなりません。利用者は収入に応じてある程度の負担をしなければならないので、本人や家族の調査も行なわれます。それにもかかわらず、特別養護老人ホームの入所希望者は非常な勢いで増え、1980年代になると各地につくられるようになりました。筑波キングス・ガーデンの特別養護老人ホームなどがつくられたのも、このころからです。

厚生労働省は総合的に高齢者福祉を推進するために、「高齢者保健福祉推進十ヵ年戦略」(ゴールドプラン)を作成し、1990年から実施しました。その結果、全国各地に、特別養護老人ホーム、老人保健施設がつくられるようになりました。1995年には、それをさらに充実させた新ゴールドプランがつくれ、高齢者の福祉施設の整備は急速に進みました。

このような国費による高齢者福祉に、また多くの問題も現われ始めます。まず、行政主導の福祉では利用者や家族の心情が理解されず、いわゆるお役所仕事になってしまい、血の通った福祉ではなくなったという批判が現われるようになりました。また、行政による厳しい指導によって、すべての施設が画一的になって、個性のある運営が行なわれなくなりました。さらに、経済的不況などもあって、国の収入が減少し、国費による福祉にも限界が見え始めました。

国民は、保険料を払い、調査と審査に基づいてサービスを受け、収入に応じてではなく、サービスの経費の10%を負担することになりました。

7.上を見上げ、前に向かって

「兄弟たち、私は、自分で捕えたとは考えてはいません。ただ一つ、後のものを忘れ、前のものに全力を傾け、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄光を得るために、目標をめざして走っています」(ピリピ 3.13—14)。

7.1 失意の中から

1990 年、60 歳を前にして、私は大きな試練に会い、失意の淵に突き落とされました。失望の中で、生きる気力も失せ、心臓の機能は乱れ、高血圧に悩まされ、夜も眠れなくなりました。幸い、教会員や多くの方の祈りによって、苦難の中にあっても支えられました。その時、コリント人への手紙第 2、12 章 9 節の聖書のことばが与えられました。

「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに現われる」

このみことばによって、あらためて深く教えられました。それまで、自分の知恵や力に頼って、さまざまな働きをしていたのではなかったか。神に問われ、深く反省しました。

そこで、パウロは言っています。

「そこで、キリストの力が私の上に宿るために、むしろわたしの弱さを大いに喜んで誇ります。それゆえ、私は、弱さ、侮辱、迫害、行き詰まりにおいても、キリストのために喜んでいきます。弱いときこそ、私は強いからです」(同 9—10 節)。

日本では、60 歳になると、還暦というお祝いがありますが、それは生まれ変わって新しい人生をはじめると言う意味でもあります。私ももう一度生まれ変わって、新しい奉仕の人生を歩もうと決心しました。

日本福音同盟の理事長に再選されましたが、健康上の理由でお断りしました。日本バプテスト教会連合の理事長の職も、良い機会を得てスムーズに退くことにしました。キリスト教界におけるすべての責任から離れ、社会的にかえりみられない人たちのために、残りの人生をささげたいと考えるようになりました。

あらためて、聖書を読み直し、「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」(マタイ 25.40)と言われたイエス・キリストのことばの深い意味を教えられました。そのみことばを、自らの生き方として受けとめ、すべての名誉と利益を求めず、最も

小さい者に仕えることを決心しました。

この世においては偉大な人が尊敬され、地位のある者が誉められます。しかし、神の価値観とイエスの視点はそれらとは本質的に違い、かえりみられない最も小さい者こそ最も尊い。それゆえに、最も小さい者に仕える事が、最も尊いのです。そこに、私たちの生き方の原点、福祉の基本があるように思われます。

7.2 実を結ぶ秋

ポール・トゥルニエは、『人生の四季』(ヨルダン社)の中で、20 歳ごろまでを成長する春、40 歳ごろまでを活躍する夏、60 歳ごろまでを実を結ぶ秋、80 歳ごろまでを成熟する冬になぞらえています。人間の平均年齢が長くなった今日、60 歳を過ぎても実を結ぶ季節であるように思われます。

日本福音同盟の責任から離れて間もなく、教会員の石井成就さんが相談に来られました。ある市の市長までされましたが、ご長男が大学生の時に心の病にかかり、それがきっかけになって求道し、家族揃ってクリスチャンになられた方です。また、精神障害者の家族会をつくり、会長としても活躍しておられました。

「キリスト教の精神で、精神障害者のための施設をつくりましょう。私が実務面はすべて行ないますから」と言われたので、私も協力することにしました。しかし、石井さんは間もなく主のもとに召され、私が設立をはじめすべての働きを担わなければならなくなりました。そこで練馬区内にある教会の協力を得、東京都や練馬区と話し合い、共同作業書「ホサナショップ」をつくりました。続いて、彼らの安住の場として、「ホサナホーム」と「第二ホサナホーム」が生まれました。

不安な時代の中で、心の病は複雑になり、また非常な勢いで増えています。これからますます重要になる働きの分野であり、教会の責任は重いです。

日本において最後のクルセードをしたいという話が、ビリー・グラハム伝道協会から伝えられました。さまざまな意見がありましたが、東京において行なうことになり、その大会会長の重責を負うことになりました。最初は固辞しましたが、最後の奉仕のつもりで引き受けることにしました。教会を礎とした実り多い大会になるように、「教会から始まり教会に終わる」というコンセプトで、東京ドームで行なうことになりました。

1994 年、約一週間大会は行なわれ、毎夜数万人の方が集い、多くの方、特に社会で活躍している男性が救われました。統計によると、その年と次の年にはバプテスマを受けた方が急増しており、豊かな実を結んだと思います。

キングス・ガーデン関係では、川越に特別養護老人ホームに続いてケアハウスを建てる計画が具体化し、協力関係や資金面で困難もありましたが、1995 年に完成しました。96 名の方が入所できる大型施設です。

近くに住んでいる区会議員の勧めもあって、練馬区にキングス・ガーデンをつくる話が進み、協力体勢を整えました。土地の確保、資金の調達、社会福祉法人の設立と多くの困難もありましたが、多くの方の祈りと協力によって、1996 年に完成しました。有楽町線平和台駅の近く、公園に面した場所に、美しい建物が建ち、充実したケアが行なわれています。

筑波キングス・ガーデンは、近くに診療所が生まれましたが、1998 年には、宇都宮施設長の努力によって地域福祉の拠点となる在宅福祉棟が立派に完成しました。また、四市が協力して障害者の施設「ふれあいの杜」をつくり、その運営を委ねられ、守谷市の福祉施設「ひこうせん」の運営も行っています。

1999 年、川越キングス・ガーデンは記録的な集中豪雨のために冠水し、存亡の危機に直面しました。しかし、主の恵みと児島施設長や職員の努力によって立派に立派に復旧しただけでなく、2001 年には新しく三十床増床し、さらに草加に大型施設が完成しました。

人間的に言えば、60 歳は定年であり、静かに余生を過ごす季節ですが、神にあっては豊かな実りの季節です。私は人生に絶望し、生きる気力も失いました。そのことを通して、すべては主の恵みであり、またこれまでの人生経験と人間関係のすべてが用いられ、豊かな実を結ぶことを知らされました。キリストにあって死ぬとき、キリストにあって豊かに実を結ぶことができます。一粒の麦が地に落ちて死ぬとき、多くの実を結ぶのです。

7.3 上を見上げ、前に向かって

年を重ね、年を取ると、考え方と生き方に微妙な変化が現われ、それは人によって大きな違いとなってきます。ある者は、失うものを数え、悲観的になってしまいます。

仕事と社会的地位を失い、親しい者を亡くし、健康を害し、死も近づくと、すべてに絶望的になります。長い人生における経験と生き方にとらわれ、新しい創造的な生き方ができなくなります。「昔は良かったが、今の若者たちは」という愚痴が絶えず口から出てきます。将

来の不安のゆえに、守る姿勢が強くなり、自分の世界に閉じこもってしまいます。適応力は弱くなり、新しい働きを創造的にこなうことができなくなります。

パウロは、人生の終わりに、多くの手紙を書いています。その一つがピリピ人への手紙です。獄中で書かれたものですが、「喜びの手紙」とも言われ、「喜びなさい」という勧めのことばがあふれています。その中の3章13節-14節に於いて、彼は三つのことを勧めています。

第一は、「後ろのものを忘れ、前のものに全力を傾け」て進むことです。過去を無視するのではなく、過去にとらわれないのです。過去にとらわれるとき、その考えと生き方は後ろ向きになってしまいます。年を重ねると、その傾向はますます強くなります。むしろ、前のものに全力を傾け、前向きに生きるように勧めています。

第二は、「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得る」ために、全力を傾けることです。地上のことにとらわれるのではなく、上を見上げる。人間的な問題や利害ではなく、永遠のいのちの恵みと祝福を知り、神の栄冠を得るために生きるのです。私たちの最大の祝福は、永遠のいのちの恵みであり、天国の希望であり、神の栄冠です。

第三は、「目標をめざして走っています」です。生きるほんとうの意味を知り、生きる具体的な目標をめざして精一杯生きることは、最もすばらしい人生です。そのような人生に定年はありません。また、パウロは、「私たちのすでに達しているところを基準として、進むべきです」(16節)とも述べ、現実の状況と状態をしっかりわきまえ、着実に目標をめざして全力を傾けて、走るように勧めています。それによって、目標を達成することができます。

私は、いま福音派の福祉について考え、それを地上における自らの生き方に重ねて思っています。福音派はこれまで福音の宣教に全力を費やしてきましたが、ややもすると観念的になったり、社会から孤立したりしていないだろうか。

日本における福祉は、歴史の大きな流れの中で本質を見失っていないでしょうか。地の塩としてのあり方はどのようにあるべきでしょうか。キングス・ガーデンは、その多様な働きにおいて、そのことを絶えず、問い続けてきました。また、人間の尊厳と永遠性にしっかりと目を留め、その全人格的なニーズに応えるように全力を尽くしています。

過ぐる二年間、毎朝4時~7時まで、聖書の翻訳を続けてきました。その翻訳を通して、あらためてイエス・キリストの教えと働きの源流と本質にふれ、多くのことを教えられました。イエスは、歴史の中で歪められた神の真理をあらためて正しく教え、人間のニーズにトータルに応えようとしておられます。神の真理を教え、神の国の福音を伝え、病める人をいやし、悪霊を追い出されました。社会的に顧みられない貧しい人や

弱い者に、最もすばらしい価値を見られ、最も大切にされました。そして、仕えられるのではなく、仕える者となりました。私は、そのイエスの教えと生き方から改めて教えられ、大きな働きをするのではなく、小さな者に仕える者になりたいと思うようになりました。キリストに倣い、上におられる神を見上げ、前に向かって精一杯生きていきたいと思います。